田の浜

船越湾に面した漁村、田の浜地区は明治三陸津波(1896年)と昭和三陸津波(1933年)でも甚大な被害を受けた。今回の津波は高さ8･35メートルの防潮堤をなぎ倒して集落に襲いかかり、指定避難場所の船越漁村センターの建物ものみ込んだ。昭和の津波の後に造成された高台の宅地まで浸水し、破壊された家屋から火が上がって背後に広がる山林に延焼、約166ヘクタールが燃えた。全壊した家屋の割合は町内で最も高く、6割以上に及ぶ。がれきで道をふさがれた地区は孤立、懸命の消火活動に当たった消防団員らを除き、住民は救助のヘリコプターで山田高校などに避難した。

死者・行方不明者	105 人
震災前の人口	1,275 人
全半壊家屋	345 戸
被災家屋の割合	71%

地図内の■は津波の浸水範囲

※地図データは震災前のもので、地区名・施設名などが手記中に登場します。

未来の山田に必要な人に

【田の浜】 1

船越小学校6年 荒川茉莉亜（まりあ）

私は、この震災が悲しいことだけを生み出したとは思いません。もう一つの何かがあったと思いました。私はその何かを、悲しみと一緒に震災から教えてもらいました。それは、「人と人とのつながりの大切さ」です。

震災から約8カ月がたちましたが、今は震災がうそのように感じます。震災によってとても不便な事があって、やった事がない事をたくさんしてきました。でも私は、それがむだな事だとは思えませんでした。この8カ月は、とても貴重な時間に思えるのです。この貴重な時間の中でたくさんの思い出をつくりました。震災前の暮らしとはまた別の暮らしをしていますが、そこには新しい楽しさもありました。

まず、お風呂が使えなかった時に、自衛隊の人たちが用意してくれたお風呂に行くと、私たちを温かくむかえてくれました。お礼を言っても言い切れないほどうれしかったです。中はとても広くて、温かかったです。その時、私は、「このありがたみをふつうのことだと思ってはいけない」と思いました。世界には、こうして私たちに優しくしてくれる人がいた事に初めて気が付きました。

その次は、修学旅行が思い出になりました。震災のために行けないかと思ったけど、行くことができてうれしかったです。これも私たちを支えてくれた人たちのおかげです。これにもお礼を言いたいです。この時に「人間は、人間に支えてもらって生きている」ということを学びました。また、「楽しさは、周りにいる人たちにつくってもらっていたのだ」ということが分かりました。

そして今年の中でも、私が最もがんばった事があります。それは運動会です。使う道具も場所もなかったところへ、全国や世界の人たちからの支援があったから運動会ができたのです。だけどほかにも、運動会が実現したわけがあると思います。それは、「みんなの心を一つにして、運動会をやろうとした気持ち」だと思います。みんなの運動会をやって必ず成功させようとした思いが強く感じられました。

運動会の中で私がとくにがんばったのが、ソーラン節とこてきパレードです。これは船越小の伝統行事だったので、地域の人たちも一番見たかったものだと思います。私たちは地域の方々にようやく恩返しができたと思いました。これは、私にとって小学校生活最後の良い思い出になりました。

この8カ月間は、町の人にとっても大事な時間だったと思いました。これからも私は、「町の復興と心の復興」のどちらにも取り組んでいって、いつかはこの町を元通りにして、たくさんの人が笑顔になれたらいいなあと思います。そして希望に満ちあふれた山田のために、未来の山田

に必要とされる人間になりたいです。それが私の夢であり、子どもたちみんなの夢だと思っています。

「やまだの作文」第40集

生涯で3度の大津波に遭う

【田の浜】 2

中村とき（93歳）

人々の心に永久に消えない記憶を刻んだ、東日本大震災から2年の歳月が過ぎた。マグニチュード9・0の大地震による巨大津波は、一瞬のうちに人の命も財も家も奪い去った。

91歳だった私には3度目の津波である。13歳の時の昭和8年3月3日真夜中の大津波、昭和35年5月24日の早朝、日本には地震もなくチリ地方の大地震によるチリ津波を経験しているが、このたびの巨大津波は言語に絶する災禍であった。海近く住んでいれば津波は常に念頭にあり、大地震のたび津波を思い、警報発令と共にいち早く高台に避難する。それを習性として海辺に住んできた。

しかし、今度の地震は今まで経験したこともない大きいものであった。私が浜の郵便局から貯金を下ろし、家に入った時だった。激しい揺れに「あっ、これは津波が来る」。とっさに思った。下ろしたばかりのお金と通帳、ラジオ、補聴器の電池、病院の薬などをリュックに入れたが、すぐそばにあった私の大事な物にすら手を伸ばせないほどの緊迫感があり、心を残しながら孫の車で高台に向かった。高台にはわが家の古い家が2棟、空き家としてあり、このような時のために電気は引いてある。ここがわが家の避難場所であり、いつも警報の時はここに逃げてくる。

場所は田の浜消防団屯所のすぐ上であるから大勢の人がいて、サイレンや防災無線の音が響き、不安と緊張感の中でどんな不測の事態になるのか、あの大地震だものと思っているうち「大きいのが来るぞー、逃げろ、逃げろー。上がれ、上がれ」の声がした。皆、一斉に高台に続く山を目がけて逃げ始めた。足が悪い私は杖をついて一歩、一歩、転ばないように山に続く丘畑を登った。誰と一緒に登ったか今思っても分からない。ただひたすらに地面のみ見て歩いたが、もう限界と思った時、山に一番近いKさんが私を背負ってくれた。そして、私を抱き上げ垣根を越えてKさんの庭の中に入れてくれた青年Iさんがいた。このお二人には今でも感謝している。津波は来ていたのであろうが、振り向きもせず登ったから見ていない。

日が暮れかかり、寒くなってきた。見ると1台のバスが山道にいた。山田幼稚園のバスが、園児を送ってきたまま帰れずにいたのだ。皆それに乗せてもらい、暖めてもらった。中には津波でずぶ濡れになった人もおり、どんなに寒いだろうと心を痛めながら見守った。そのうち、木の間越しに炎が見えた。火災発生である。バスは何度も移動し、民家近く来て止まった。私は古家に帰ったが、バスの運転手さんが暗くなった道を手を取って送ってくれた。

その夜は食事もしたかどうかも記憶にない。横にもならず古家がつぶれるかと入り口に腰をかけたまま、地震のたびに外へ飛び出した。私と娘、避難してきたMちゃんと3人、ラジオを聞きながらであったが、男性たちが中にいたから心強かった。地震のたび、外へ飛び出してみると、流れた浜は真っ暗な中に赤々と火事の炎が見え、時々プロパンの爆発音が聞こえる。民家の火事は山に飛び火して高台の山は所々に山火事が発生した。燃え広がったらどこに逃げたらいいのか、雪も降って寒い。屯所には大勢の人がいて、山火事の消火で慌ただしい。この世の地獄とも思われる中で、ひたすら夜の明けるのを待った。

夜が明けて見た惨状は恐るべきものであった。昭和8年の津波後に造成した高台は安全と思われていたが、そこまでも津波は襲った。昨日まで人々が生活した物全てががれきとなって、下の浜から山のように押し上げられている。高台の家々も浸水、破壊された。

流れた浜に二夜を過ごし津波3日目、ヘリコプターで山田高校に運ばれた。宮古の職場から山伝いの道を帰ったという孫娘が私を見つけ、家族の無事を喜んだ。この大災害の中で避難所では人々は心を寄せ合い、労わり合い、嘆きを分かち合った。その中で昼夜休まず励む保健師さんたちには頭の下がる思いがした。

津波から5日目、やっと道が通ったと釜石から孫夫婦が来た。年寄りの私がいては皆に世話を掛けるので、私だけ釜石に行くことにした。途中の惨状はむごく悲しかった。国道と新しい三陸縦貫自動車道を通り、徒歩の人を4人乗せた。私はこの時「道」の大切さをしみじみ思った。

釜石から支援に来る孫夫婦について、たびたび田の浜に来たが、初めてわが家を見た時の衝撃は強く、辺りに自衛隊、県警の人たちがいるのも憚(はばか)らず声を上げて泣いた。私の部屋のあった木造家屋は流失、形のみ残った家は屋上に物が上がり窓は破れ、空洞化した家の窓から向こうのがれきが見える。何という無惨、一浜壊滅である。廃墟のごとく化した浜に立っていると、寒々とした風が心の中を吹き抜ける思いがした。この小さな浜で死者、行方不明は100人以上と新聞は報じている。その中に95歳の姉もいた。来るべき終末は安らかにと思っていたが、「シーサイドかろ」（介護老人保健施設）で流され、いまだ不明である。そして定年を3月末に控えた甥は大槌町役場で、会議中とかに被災し、行方不明でいる。

この巨大津波の前年の平成22年2月28日、2度目のチリ地震による津波警報が出た。しかもこの時は津波の上に「大」の字がついた。今までにない大津波警報にどんな大きい津波が来るかと、午前であったから夕食まで持って避難した。何時間たっても津波の気配はなく、夜遅く50センチくらいの潮位の変化が報じられた。この時ばかりでなく、警報が出ても大きな津波が来ることはほとんどなかったから、人々は大津波と言ったってその程度だと思ったかもしれない。けれども自然災害に油断は禁物である。「想定は何メートルだから」「ここまでは今までも来なかったから」とか、「津波が来ると思わなかった」とか聞くけれど、大地震即津波を思い、いち早く高台に逃げ、忘れ物をしても取りに戻ってはいけない。自然災害の猛威を軽く見てはいけないことを後世に伝えたい。

このたびの震災に際し、日本全国、海外からも心温まる支援を受けた。自衛隊、各県警の車、支援の方々の車が雪の日も雨の日も走っている。出会うたびにお辞儀をしているが、その都度、ありがたくて涙が出た。漁村センターが被災したので田の浜地区の中心部は消防屯所に移った。その近くに避難していたから、私はその様子をつぶさに見た。物資の支給、医療、給水、炊き出し、その他どれだけ人の情けを受けたことか。強風の日も大雨の日も炊き出しがあった。こんな日に私たちのために足を運んで下さる方に感謝し、心の中で手を合わせながら食べた。2年が過ぎても感謝の心は常にあり、亡き人々への鎮魂の念を、受けた恩をいつも心に忘れず、復興への道を前向きに進んでいきたい。

火事から逃げ回った日々

【田の浜】 3

田の浜婦人会長　菊地みち子（57歳）

何事もなく過ぎるはずだったあの日、親戚の家で娘と孫とのんびりお茶飲みをしていた。突然の大きな揺れ、長い時間揺れた。8カ月の孫を抱いた娘に「屋根から瓦が飛んでくるから外へ出るな！」と大声を出して、すぐに高台の自宅に帰った。自宅の義父と義母は無事に安全な所にいた。余震の中、前民生委員として、自分の担当地区だった一人暮らしの高齢者の家々を見て回った。デイサービスに行った人以外は家にいて、全員無事だった。「すぐに避難場所になっている瑞然寺に逃げて！」と声を掛け、目の不自由なKさんをお寺の広場に連れて行った。その時には、わかき保育園の園児は広場に避難していて、軽トラックの荷台にいた。

自宅に戻り、2階から海を見ていた。対岸の山の内の方に養殖いかだの浮き玉が流されていくのが見えた。私はそのまま階下に下りたので、その後の様子は見ていない。ほんの数分後に下りてきた夫が「これはとんでもないのが来る」と言いながら外へ出て行った。義母に夫を呼び戻すようにと大声で言われて外に出た。道路脇の階段まで来て驚いた。４００メートル近く離れた海岸の漁協給油所の油タンクがSおじさんの家の所にあった。「何で？」。理解できないまま道路に下りたら、水が、Sおじさんの家からさらに4軒上の「上倉（わぐら）」（屋号）の玄関近くまで来ていた。それが津波だと気付かずに「どこの水道管が破裂したのかな」と思っていた。その時、夫が大声で私を呼び「T子（Sおじさんの娘）を連れて行け！」と彼女を水の中から引っ張り出してきた。

彼女は目の前で家と両親を流されて、ただただ泣き叫んでいた。何とか彼女をわが家に連れ帰り、びしょぬれの衣服を着替えさせていると、次から次とぬれた人たちが避難して来た。義母と2人で着替えを出したが、どうにも足りない。何が何だか分からず、服やら綿入れを出していたら「火事だから逃げろ」と言われた。それから、近所にいる人たちと共に瑞然寺の修練道場（旧ホテルタブの木荘）へ車で避難した。

タブの木荘のガス炊飯器が使えることが分かり、炊き出しをすることになった。近所の家や山が燃えている中、自宅に米を取りに行ってくれた人、寒くなるからと灯油やストーブを取りに行ってくれた人、家から血圧計を持ってきて血圧を測り「大丈夫だよ」と安心させてくれた人など、いろんな人の協力があった。小国屋さんからは、カップラーメン、乳製品、子供たちのためにお菓子やら、たくさんの品を差し入れてもらった。瑞然寺さんからも米やみそ、ろうそくをダンボール箱でもらった。ろうそくの明かりの中、皆の協力で避難した150数人は、余震におびえながら何とか一夜を過ごした。

翌日の午後になり、自衛隊のヘリが救援物資を届けてくれるということだったが、山火事がタブの木荘に近づいてきたので、急きょヘリで全員避難することになった。それぞれが着の身着のままでヘリに乗り込み、山田高校の避難所へ向かった。私は自宅に残った。わが家に男たちが6、7人とどまるので、食事の用意を頼まれたのだった。

昼夜を問わず、風向きによって、どこへいつ逃げればいいのか、夫から聞いてばかりいた。今夜はこっちへ逃げろ、明日はあっち、と4日間、山火事から逃げ回った。

夫や近所の男の人たちは水不足の中、必死で消火作業をしたそうだ。家の後ろを流れる小川をせき止め、水をためて使ったり、わが家の地下水をバケツでくみ上げたりして家に燃え移るのを防いでくれた。

だが、どこでも水は足りず、山へ延焼してしまった。消防団はそれから毎日、山の消火活動に

追われ、見ていて本当に頭の下がる思いだった。日中は捜索活動、サイレンが鳴ると、昼であろうが夜であろうが水を背負い、スコップなどを持って山に入って消火活動をしていたので、体も心も疲れ果てていたと思う。限界を超えながらも頑張っている姿を見て、言葉に言い尽くせないほどありがたかった。

初日、あの火の燃え盛る時に、近所のお嫁さんを連れて旧タブの木荘からわが家まで何回も水くみに来たことを今思うと、ぞっとする。何事もなかったからよかったが、もしもの事があったら、彼女の家族に申し訳ない事をしたでは済まされないと反省している。どんなときも冷静に行動することが必要だとあらためて思う。

「忘れない・そして前へ」

亡くなった人の分も生きる

【田の浜】 4

五十嵐浩子（70歳）

あの日の午後1時20分ごろ、「今日は瑞然寺コースね」と、友達と2人で散策に出掛けた。その日の気分によって、山から海岸に抜ける瑞然寺コースか、逆の道をたどる荒神（あらがみ）コースかのどちらかを選び、草花を見てはおしゃべりをして、1時間くらい歩く。あの日も山を下り、荒神の浜

に出た。気のせいか、いつもよりきれいに見えた海。千年に一度ともいわれるあの日にぶつかるとは思いもしなかった。

家に着いたのが午後2時20分ごろ、夕食の支度には早いが、同級生から頂いたカキをフライに作り終えて、テレビの前に座る。その後、あの大きい地震、頭がパニックになったが、それでもガスの元栓を閉め、ストーブを消す。なかなか収まる気配がなく、夫は自治会へ行った。何が何だか分からないが、「冷静になるんだ」と自分に言い聞かせ、大切な物をまとめ外に出て、家の周りの人たちに声を掛けながら、避難場所になっていた漁村センターへ行く。広場に20分くらいいたかな。いとこの人たちと5、6人で……。

今になって思うのは、あんなに時間があったのに、何で早くもっと高い所に上がらなかったのかということだ。悔やんでも悔やみ切れない。同級生の一声に無我夢中で走った。途中、知人のおばあさんに手をつかまれた。最初は、しっかりつかんだが、息子さんに支えられていたので、それを見て手を離した。海の方を見たら、何と家の高さの2倍もの黒い波が目に入った。

それからの記憶がぷっつりと消えている。孫の友達の「ばあちゃん、早ぐ！」との大声にわれに返ったが、頭は真っ白で、涙も出ない。気がついたら高台の山だった。15年間もウオーキングを続けていたので、足腰には自信があった。夫も無事だった。大粒の雪が降り、足はガクガク、言葉にならない。周りを見れば火事。暗くて何も見えない。高台で残ったのは夫の実家だった。火事は風の向きが変わったので延焼はないと判断し、その日は実家に兄弟たちとごろ寝した。

次の日、火事は収まるどころか、飛び火する危険が出てきたので、避難所の山田高校にヘリで移ることにした。そこで4日間世話になり、実家に戻った。人の事を考えるどころか、自分の事さえ何をしたらいいのか、どうなったらいいのか。気が狂いそうだった。

おばあさんの手を離した時の感触が頭から離れず、夜になると寝るのが怖い。おばあさんは流されて亡くなったと後になって聞いた。悪い事をしたと罪悪感だけが残った。でも生かされたのだから、あの人たちの分まで生きなければ。実家に50日間お世話になり、その後、山の内のみなし仮設に夫と2人で生活して今に至っている。

「忘れない・そして前へ」

より高い所へ逃げねば

【田の浜】　5

金子真喜子（59歳）

あの日のことは一日も記憶から消えることはない。生涯忘れられない、忘れてはならない3月11日となった。

月命日にテレビ等から流れるニュースを耳にすると、あの日の自分の行動が脳裏に浮かんで、「どうしてもう少し高い所へ、どうして一緒に上へ、どうして！」と、何度も自分に問いかける。

あの日の午前中からの行動が、テレビのチャンネルを変えて観る映像のように、何度となく浮かんでつらくなる。津波の犠牲になった親戚や両親の友人、同級生、幼いころからの顔なじみ、知人の方々を思うと、目頭を押さえてしまう。

午前中に、箱崎（釜石市）の叔母から間引き若布（わかめ）を頂いてきたので、お昼もそこそこに、親戚におすそ分けの準備をして車で出かけた。とても寒い日だった。友人の所で立ち話が長くなり、暖かい茶の間に通されて間もないその時だった。「あっ、地震だ」。想像を絶する大地震だった。なかなか収まらない大地震に、じいちゃんの肩を押さえながら、じっとしていることしかできなかった。テレビが消えて停電になった。

余震に震えながら家の方に戻ると、防災無線から「3メートルの津波」という言葉だけが耳に入った。一人暮らしの分家の叔母が心配になり、とっさに玄関にあった長靴に履き替えて走った。叔母は手押し車を押して、実家の義姉を迎えに行くところだった。「行かないで」と私が代わりに叔母の実家へ走った。胸がドキドキして、長靴の足は思うように進まなかった。高齢のおばさんは、しっかりした足取りで気丈に手押し車を押して歩いて来ていた。

急ぎたい気持ちを抑えて、ゆっくり一緒に進んで分家へ到着した。「ここまで来れば大丈夫」の言葉にホッとしたことを覚えている。その時、私は「3メートルの津波」を忘れたのだろうか。どうしてあと100メートル、いや50メートル歩いて高い所へ行かなかったのか……。悔やんでも悔やみ切れない。2人とも大津波に巻き込まれてしまった。叔母は命からがら助けられたけど、おばさんは帰らぬ人となって見つかった。私は「2人のおばちゃんを流してしまった」と悔いて声を上げて泣いた。

次の日、叔母と再会できた時はうれしかった。安堵した。「津波はまた来る」。高い防潮堤が出来ても、過信せず「高い所へ、より高い所へ逃げる」。自分を見失わないように、慌てず、素早い行動で避難することを自分に誓った。

「忘れない・そして前へ」

内陸にいて難逃れる

【田の浜】 6

後藤マツノ（68歳）

あの日、私たち一族は分家の長女の結婚式で奥州市にいました。

「何で平日の結婚式なんだろうな?」。私たちにとって、この日取りが明暗を分けるとは思いもよらず、そんな気持ちが胸をよぎりました。

着付けを済ませ、両家の集合写真のシャッターが切られようとしたその時、ゴーッと大きな音と共に激しい揺れ。天井の照明が落ちてくるのではないかと思わず伏せました。揺れは収まることなく続き、ホテルの中庭に避難したわれわれは式だけはどうにかその場で挙げ、披露宴は延期

となった。

車のラジオが大津波を報じていた。他のホテルに移り、電灯のない所で食事を済ませ、各部屋で休んだ。夫と息子夫婦と孫2人、6人そろって少しの間、幸せだった。

夜が明け、早々に宿を後にした。盛岡方面に向かい、国道106号線に入る寸前で沿岸に行く道を止められてしまった。右往左往したが、何とか106号へ入ることができた。釜石に住んでいた息子たちは遠野回りで行くことにして、二手に分かれた。義弟の知り合いから食べる物が届けられた。他人の情けがうれしかった。その後、私たちは食事に困ることはなかった。

宮古に近づいた時、また道は通行止めとなった。通ったことがない山道を越えて、着いた所は織笠のサケふ化場の前だった。田の浜の消防団員が病人を乗せて、奥の方面に走って行くのを見た。近所の人だった。車を置かせてもらい、徒歩で山田道路に登った。痛めた膝が完治していなかった私にとって、きつい坂だった。眼下に織笠地区の火災が見える。家屋はなかった。途中で知り合いの車に乗せてもらった。

彼は一言「おっかあ（妻）を流した」と言った。慰めの言葉も言えず、胸がしめつけられそうだった。彼女は娘の友達で、私が知った1人目の犠牲者だった。山田道路を湾台地区に下りた。義弟たちが経営していた自動車工場は、曲がった骨組みだけ残して水の中に沈んでいた。もし結婚式がなければ、夫をはじめ義弟たちは無事に避難できたのだろうか。もしかすれば……とぼんやりと考えていた。地元にいなくて助かったのだと、声を上げて泣いた。

田の浜に行く道路は寸断され、湾台の友人宅で過ごした。息子たちの安否も分からず焦った。4、5日したら友人の息子さんが釜石方面から帰宅した。「通れる」。夫と2人で釜石に向かった。息子の会社を訪ねた。「いた」。孫娘が駆け寄って来て私に抱きついた。愛おしかった。会社は電気もついていたし、寝る所も確保できていた。一安心。

がれきの片付けや不明者の捜索に出ていた夫は疲れたのか、風邪を引いてしまい、それを機にわが家に戻った。友人や一緒に暮らした皆さんに心から感謝しながら、月は4月に変わっていた。多くの人が犠牲になり、多くの物が破壊された。自然の出来事は人間の力では防ぐことはできない。あの時のショックは私から思考力を奪ってしまった。どうしてあの事をしなかったのか、なぜその事ができなかったのかと反省している。物忘れが激しいのは震災のせいか、年のせいか（どちらもだろう）。毎日、物探しをしている今日このごろだが「負けるものか」と空元気を出し、「人生全うしてやる」と意気込んでいる。

「忘れない・そして前へ」

常に津波の備えを

【田の浜】 7

佐々木サツ（62歳）

私たちは、毎月のように11日はお墓参りに出かけています。2年半たった今でも、あの日の事を思い出すと気持ちが沈んでしまいます。

地震があった時間帯、私は飼い犬の散歩中でした。石山水産の手前の堤防の辺りで、突然大きな揺れに襲われ、立っているのが精いっぱいでした。揺れと同時に、目の前の地面に無数の亀裂が入り、動揺しながらも大急ぎで家に戻りました。その後も大きな余震が続き、着の身着のまま、またすぐ外に出ていました。庭でおろおろしていると「津波が来るぞ、早く逃げろー」と義兄が大声で叫びました。貴重品を取りに家の中に入った家族に「早くー」と声を掛け、私たちは家の脇の墓所への道を急いで駆け上がりました。

背後の海からゴーッと大きな音が聞こえ、途中で振り返ったら、下の道路に大量の水があふれ、車や船がすごい勢いで流れていく光景が見えました。後は振り返ることなく、無我夢中で墓所までの道を駆け上がりました。

墓所に着くと、先に避難していた人たちが津波の様子を上から眺めていました。大波が家々をのみ込む音と、見ている人たちの悲鳴のような叫び声、プロパンガスの爆発音も聞こえ、火の手も上がり、辺り一帯が壊滅状態でした。

日が暮れる前に墓所から八幡神社へ移動して、一晩を過ごしました。雪のちらつく寒い夜でした。たき火で暖を取ったこと以外、周りに誰がいたのか、誰と何を話したのかあまり覚えていません。暗闇の中で、時々揺れる余震と、遠くに見える火事、爆発音におびえ、ただただ不安で心細い夜を過ごしました。

翌朝、船越地区を目指し、がれきで覆われた道を皆で移動しました。私が暮らしていた早川（そうかわ）地区は、全く家が残っておらず、弟が住んでいた日向脇（ひなたのわき）の家も見当たりませんでした。見たことのないがれきの山に言葉が出ませんでした。時間の感覚も空腹感も全く感じないまま、目の前のがれきを避け、ひたすら歩いたことだけが記憶に残っています。

弟はいまだに行方不明です。兄も震災の3カ月後に亡くなりました。たくさんの同じ地区の人たちが亡くなりました。もう一度会って話をしたい人たちが大勢います。住んでいた家が流され、大切な人たちを失い、それでも生かされ、今日があります。

震災を経験して、当たり前のような日常が、どれほど掛け替えのない恵まれたものだったのかということに気付かされました。この地域で暮らすということは、常に津波を想定して、日頃からいろいろ備えておくべきだと痛感しました。避難所で生活を共にし、支えていただいた地域の方々と、大勢の方の温かい支援に救われました。ありがとうございました。

「忘れない・そして前へ」

町のにぎわいを再び

【田の浜】 8

佐々木しめ（77歳）

あの日の事を思い出すと涙がこぼれそうになり、胸が痛みます。

午前10時、ある会社が移転するためお別れイベントがあり、長男の嫁と2人で山田の長崎地区におりました。午前11時、田の浜に帰り、親類の家に寄ってお茶飲み会。その時、2日前の大きな地震の話から「もし、津波が来るったら、米とみそを持って行くから泊めだんせ（泊めてくれ）」と兄が言う。「米もみそも持たなくていいから急いで逃げて来て」と私。正午のチャイムが鳴り、帰宅しました。それから3時間ほど後の大震災。山を越えて逃げてきた人たちに兄夫婦の安否を尋ねても、誰も分かりません。ずぶ濡れの人、赤ちゃんを抱いた若いお母さん、その他、十四、五人の方たちが、かろうじて難を逃れたわが家に入って来ました。皆で協力し合い、炊き出しをして共に頑張りました。

そのうち住宅火災が発生、山火事も迫り、八幡様に移動。私たちは車の中で暖を取り、一夜を明かしました。しかし、山火事はますます激しくなり、私たちも八幡様に避難しました。そこには幼児の遺体が横たわり、可愛い靴がそろえてありました。涙があふれ、合掌し、まんじりともせず夜を明かしました。その晩は幼児のお母様も見えず一層悲しみが増しました。学校で受け持ちの児童にかかりきりだったという、お母様の気持ちを思うとき、かわいそうでかわいそうでなりませんでした。

3日目、山火事が目前に迫り、避難指示が出ました。83歳のおばあさんを先頭に4人でがれきを越え、倒れた電柱をくぐり、あの沢、この沢と、津波被害のすさまじさを目にしながら歩き続けました。海蔵寺もありません。ショックでした。約1時間歩きましたが、もう歩けず、戻ろうとした時、小型トラックが通りかかりました。海蔵寺の裏の辺りで乗せてもらい、陸中海岸青少年の家にたどり着き一晩お世話になりました。

4日目にようやく長男とも会うことができ、ホッとしました。それぞれが大変な目に遭い、命をなくした人、家をなくした人と枚挙にいとまがありません。あれから2年8カ月、被災された方々の何の力にもなれませんでしたが、命からがら難を逃れてきた人たちに温かい食事と部屋を提供できたこと、それだけでも心が休まります。

行方不明の兄夫婦、その他多数の犠牲者の方々へ手を合わせ、お寺さんの仮本堂のご位牌を手でなぞり、冥福を祈るのみです。一日も早く復興住宅のめどがつき、元の田の浜のにぎわいが取り戻せたらなあと思う毎日です。

六地蔵二体となりし寂しさに心をこめてご詠歌唱（とな）う
空晴れてみ霊に捧ぐご詠歌と鯨の峰にかかる海霧

視覚障害の夫と共に

【田の浜】 9

佐々木スエ（75歳）

視覚障害者で自由に歩けない夫を避難させようと、私は息子と娘と頑張っていました。夫の身体がなかなか思うように動かず玄関で迷っていると、近所の父さんが夫を背負い、高台の「山っこ」（屋号）の家の下まで連れて行ってくれて、そこからは、「おりわやタクシー」の正純さんに車いすを貸してもらいました。山っこの上り坂は一人や二人の力では車いすは動かず、周りの方に助けていただきました。本当にありがたかったです。

暗くなるまで山にいましたが寒さに耐えられず、真っ暗な家に戻りました。帰る時もまたリヤカーを借りてきて乗せてくださった方がいました。近所の方や見ず知らずの人たち、たくさんの方に手伝っていただき、心から感謝しております。

普段からこういう場合に備えて「ああしよう。こうしよう」と相談はしていましたが、実際にあの日のようになると、気持ちばかりが焦ってしまい、思うように動けないことがよく分かりました。視覚障害者の夫は、私以上に周りも見えず、相当不安であっただろうと思うと涙が出てきます。

あの日は本当に寒かったですし、波が引いた後も何かが爆発する音や火事で田の浜は火の海になっていました。一睡もできず、余震におびえながら朝になりました。

山に火が回ったので、田の浜の人たちは全員避難ということになり、夫は近所の車で旧ホテルタブの木荘まで送っていただきました。そこからヘリコプターで、身体の不自由な人やけがをしている人を先に乗せて避難させるということでしたので、私は一緒に乗ることができませんでした。「夫は目が見えないので心配で」と必死で頼みましたが無理でした。「ヘリはどこへ行くのか？　下ろすのか？」と聞いても、その都度変わるということで、分からないまま飛び立ちました。結局、夫と離れ離れのまま、私たちは船越まで歩きました。途中の道路もなく、すっかり変わり果てた田の浜を目にしながら、ただただ必死で船越まで歩きました。途中の夕日が不気味な赤い空でした。

船越に着いた時にはすっかり暗くなっていました。船越湾漁協の船越支所に避難しながら夫を捜しました。電話も通じず、いろいろな方から聞いてもらいましたが、夫の避難先は分かりませんでした。離れて出掛けたことは一日もなく、右も左も分からず、どんな思いでいるのかと、ただただ心配でした。

避難6日目に山田南小学校でやっと会えました。「父さん」と声を掛けたら、「母さんだぁが、

母さんだぁが（母さんか、母さんか）」と言って涙を流して私の手を握りました。目が見えなくてどんなに不安だったろうと思うと、かわいそうでただただ私も泣きました。その後、夫はトイレに行くこともできなくなり、寝たきりになりました。南小学校にいる間も、見ず知らずの方々にお世話になりました。

避難所で2週間、実家で10日ほど過ごした後、田の浜のわが家に戻ってきました。電気も水もない間の夫の世話は大変でしたが、夫にとってはわが家が一番で安心したようでした。帰ってきてよかったと私も思いました。ケアマネジャーさんと相談して入浴車や介護ベッドを利用し、訪問診療などでヘルパーや看護師の方々にもお世話になりました。

皆さん一人一人がつらく、大変な思いをしたと思います。あの日、あの時を一生忘れることはないでしょう。

たくさんの方々にお世話になりました。心より感謝いたします。ありがとうございました。

「忘れない・そして前へ」

津波碑の教訓、心に刻み

【田の浜】 10

佐々木タミ（83歳）

私たちは船越尋常小学校に通学しました。旧佐々木漁業部の入口の右側に大きな石の記念碑があります。昭和8年の津波の後に船越村で作ったそうです。それに刻まれた内容は次のようなものです。毎朝、その碑の前を通る時は心の中で2、3回つぶやいたものでした。

【大海嘯（かいしょう）記念】

一　大地震の後には津波が来る
一　地震があったら高い所へ集まれ
一　津波に追はれたら何處（どこ）でも此所位の高い処へ
一　遠くに逃げても津波に追付かる
　　近くの高い所を用意して置け
一　縣指定の住宅適地より低い所へ家を建てるな

あの日、私はタコをゆでる準備をしていて、仕上がりをきれいにするため、足を1本ずつ塩で

もんでいました。その瞬間、恐怖の大地震に襲われました。タコのことも忘れて、大声で「神様、仏様、地震を何とか止めてくたんせ（止めてください）」と叫び、気がついたら、テレビにしがみついていました。神棚や人形ケースなど家中の物が飛び散り、私は位牌など仏様の物や枕元にある大切な物だけを手提げ袋に入れ、夢中で家を出ました。

すぐ坂道を上へ上へと歩きました。上の人たちは「よく来た、よく来た」と言って喜んでくれましたが、私は涙ぐむだけでした。「山っこ」（屋号）の高台に着いて、雑草の上に腰を下ろし、向かいの海を見つめてびっくりしました。夕日のためでしょうか。いつもより海面が膨らんだようで恐怖を感じました。

私たちを育ててくれた大事な海が襲いかかってくるのを見て、本当に悲しくて、寂しかったです。ただ、目をつむっていました。下の方から屋根だけがいっぱい流されてきて「私の家も入っているのかな」と思うと、何も考える気持ちになりませんでした。ガスボンベがボン、ボンと大きな音を立てて、煙はもくもくと上がり、町は火災で焼けそうになりました。

2日目、陸中海岸青少年の家に避難するため、午後3時ごろ出発しました。山のいばらや雑草の中、下り坂は歩けないので、滑りながら下りました。青年たちは両腕を支えてくれて「母さん、大丈夫だんか」と、何回も気遣ってくれました。涙がボロボロ出ました。3時間くらいで国道に出て、漁協の職員たちに車で青少年の家まで送ってもらいました。田の浜の人たちは皆、小さくなって座っていました。寒かったです。

大きな体育館で、妹と毛布2枚を借り、丸くなって眠ろうとしましたが、眠れません。でも、妹に「姉さん、3時間くらい眠っていたよ」と教えられ、助かった気分でした。妹は全然眠れなかったと言っていました。次の日は妹の娘の家に泊まりました。女孫たちの世話になりました。

4日目でようやく宮古市新里（にいさと）に住んでいる娘たちと連絡が取れ、夕方、娘の家に着きました。娘は電話だけを持ち、3日も4日も家を出たり入ったりして、言葉も出ないくらい心配していました。

2人の男孫が会いに来ました。「ばあちゃんは仏様だけ持って来たがよ」と言い、後は震えて声になりません。私より大きな孫たちにしがみついて、ただただ泣き通しました。世界各国の方々、また知人、友人、兄弟から、お見舞いや物資をいっぱい頂いて感謝に堪えません。自衛隊の皆様、県地域婦人会の皆様、ありがとうございました。

やはり、津波が来たら高い所に集まるということを、先祖の教訓と受け止めておきたいと思います。道路が整備されてから津波記念碑の所に行ってみたら、碑は後ろの方に傾いていました。何も言えず両手を合わせてきました。

「忘れない・そして前へ」

明治津波の教訓語り継ぐ

【田の浜】 11

佐々木房子（79歳）

あの日、私は山田で所用を済ませ、自宅に向かって車を走らせていました。消防団員に叫ばれ、いったんは高台に避難したものの、そこにいた知人に「家さ帰るなら、今すぐだがえ！」と言われ、無謀にも家へと向かってしまいました。

2度の危機にさらされながらも、義姉と共に早川（そうかわ）の「ノンキ山」に逃げて運良く助かりました。当日と翌日の二晩は田の浜の八幡様で過ごし、3日目は津波直後から燃え続けていた火の手が、風向きが変わって田の浜全体に及ぶ恐れがあり、全員避難せよとの指示で、陸中海岸青少年の家に移動しました。そこでも二晩過ごしました。

5日目になって、やっと私の所在が分かったと姪が迎えに来てくれ、それから約1カ月間、宮古の姉の家で4世帯10人で暮らしました。

ところが、宮古の個人宅に避難していると、山田の情報がなかなか入って来ません。困っていたところに、宮古市から内陸への集団避難の提案があり、山田の人たちと一緒ならと参加することに決めたのです。行き先は雫石プリンスホテル。約4カ月お世話になりました。そこでいろんな出会いがありました。友人、知人、学校の元同僚、学生時代に盛岡で共に勉学に励んだ同期の白梅寮生、等々。

私の消息を知りたい人たちが「駄目で元々」と流失したわが家宛てに出した手紙やはがきが、1カ月もかかってホテルに届いた時の感激。「日本郵便も大したものだ」と手紙の主と話したものです（往復はがきでくれた寮生の優しい心遣いは、とてもうれしかったし助かりました）。

ホテルでは私たち被災者を元気づけたいと、いろいろなボランティアのイベントを受け入れてくれました。その一つに雫石混声合唱団があります。最後に歌った「大地讃頌」の力強さと迫力に感動して余韻に浸っていると、1人の男性団員が「専蔵（夫）さんの奥さんでない？」と駆け寄って来てくれました。驚きました。岩泉町の僻地で一緒だった元同僚です。他にも昔の同業者が数人いて、その中の3人が退職女教師の会の会員ということで、新たなご縁が生まれました。私の喜寿のお祝いも、雫石退女の会に招待されて祝ってもらいました。

またある夜、独り静かに温泉に浸っていたら、横浜の退職した仲良し2人組が入ってきました。その場の成り行きで被災の状況を話すと、涙を流しながら聞いてくれました。「翌日帰る」と言っていた彼女たちから「私たちは東北に旅するのも支援の一つと思って来ました。まさかここで被災者と出会えると思ってもいませんでした。今は旅の途中ゆえ、大した事もできませんが皆さんで食べてください。たとえ一瞬でも皆さんの力になれたらうれしいです」との添え書きと一緒に、盛岡で買ったらしいゼリー菓子が50個も送られてきて、驚いたり、うれしかったり。この2人とも、今なお交流が続いています。

プリンスホテルに避難したご縁もあって、私の被災体験を大勢の人々に語る機会が2回ありました。一つは、山形の天童市で開催された退職女教師の会東北大会。もう一つは、岩手山麓の焼走りで行われたヨーガの会主催の岩手大会です。その他、30人前後のこぢんまりとした会合でも3カ所でお話しました。

今回の津波で被災した多くの方々が語り継ぐ事の大切さ、必要性を強調しています。私も全く同感です。90歳になる義姉は、明治の津波で両親を失い津波孤児となった父親から「津波の時は、この山さ逃げろ」と幼いころから言われ続けて育ち、明治の津波から115年後に起きた今回の大津波で、父の教えを忠実に守って助かりました。その義姉と行動を共にして助かった私。明治津波の体験者の伝承を受けて助かった者として、今度は私も継承者として一役を担わねばとの思いがどこかにあったことは確かです。だから、依頼されると引き受けて語ってきました。

語り継ぎの方法は、いろいろあります。文集にまとめるのもその一つ。婦人会のこうした取り組みは大変素晴らしいことだと思っています。

今、私は被災地・田の浜を離れて、関口の仮設に住んでいます。被災して、車なしの生活が2年9カ月になりました。活動量は半減しました。不便でどうしようもないと思いながらも、今ではここなりの楽しい暮らし方を見つけています。週2回の卓球、週1回の談話室での編み物教室、ウオーキング。それに不定期ながらの諸活動です。

田の浜婦人会の被災者に対する援護の多さ、温かさ。遠方に居住する者への配慮、気配りと他には見られない人間愛に基づいた活動理念を、しっかり感じています。いつの日か、私も田の浜に帰ります。そして、田の浜の土になります。

最後に、婦人会、地域の皆様に幸あれ、と祈って終わります。

「忘れない・そして前へ」

それでも海を恨めない

【田の浜】12

下村房子（65歳）

「早く逃げて。早く、早く」。どんなに大声で叫んだことか。思い出すと涙が出てきます。私は津波の時、2階のベランダにいました。そこから見た光景は、あまりにも無残で言葉を失うありさまでした。家々の屋根が次から次へと流されて、漁協のオイルタンクが浮いたと思ったら、とんでもない勢いで山側の道路を流され、防波堤が崩れる様子が見えました。

真っ黒いすごい高さの壁のような荒波が、しもかわ公園に見えました。私は、ベランダの柱にしがみつき、恐怖のあまり体が震えました。逃げ遅れて、流れてきた家々の下敷きになり、犠牲になった人が何人もいました。

家の前で止まっていたバスが浮かんで道路をふさいでいました。津波は逃げ遅れた人たちを目

の前でのみ込んでいきました。あと1、2分早く高台に上がってきていれば助かった命なのに。知っている顔の人たち、今でもあの時の光景が脳裏に焼き付いて、震災から2年半を過ぎても、思い出すと涙が出て眠られず、何回も目が覚めるときがあります。

津波が去った後、1階に下りてみると家の中は泥と水浸しになっていました。今度は、火災が発生して多くの家が焼け、山にも飛び火して四方八方から火が上がり、夜は赤々と家や山が燃え、「田の浜はもう全滅か」と思うと身体の力が抜け、何の意欲もなくなっていました。

町から避難指示が出た時、田の浜は陸の孤島になり、人々は家々から避難していなくなっていました。津波で残った家だけでも火事で焼きたくないと、少人数の消防団員、地域の人たちで夜も寝ずに消火活動をしました。その時、夫から「母さん、この火事を放っておいて避難することはできない。津波で残った家を火事で燃やすことはくやしい。俺も頑張るから、お前も頑張って消防団員の食事の支度をしてくれ」と言われた時は、何とも切なく、やるせない気持ちでした。残った少人数の団員は、雪と寒さの中、着衣はびしょ濡れでした。顔は真っ黒く、津波と火事で疲れ果て、若い団員は慣れない山火事と恐怖感で途方に暮れ、私に抱きついて泣く子もいました。とてもかわいそうでした。

道路はがれきの山でふさがり、食料品もなく、何を食べさせようか苦労しました。消防団員と地域の人たちが遺体捜索をして、何人も見つけたけれど遺体を運ぶ物がないと言われ、毛布、タオルケット、その他を出しました。遺体が見つかるたび、「どこの母さん。今日はどこそこの父さん」とみんな知っている人たちばかりで、心が痛み、身震いする毎日でした。

家を失った人々、家族を亡くした人たち、誰もが想像を絶する震災の犠牲になりました。でも、月日が過ぎるといつまでも海を恨むことができず、毎日、戸を開ければ海を見て暮らさなければなりません。

夫は「漁師は、海の恵みでお金を取り生活できるから、海を恨むことはできない。何せ〝太平洋銀行〟だからなあ」と笑っています。いつまでも泣いてばかりいても、幸福の神様は去っていくから、前向きに生きようと思います。

「忘れない・そして前へ」

【田の浜】 13 毎日同じ空もなし

中村百合（81歳）

「千年に一度の大津波」といわれるあの災害によって、全てを失い、それぞれの人生が変わった。「3月11日」を絶対忘れない。

私はあの時、外にいてスイセンのつぼみを数えていた。突然にものすごい音と大きな揺れが来た。立っていることもできず、そばにあった杭にしがみついた。身体が半回転する。怖くて地面

に座り「おっかねー」と叫んでいた。全身を恐怖が走る。

地割れがして、地の底に引き込まれそうに思えても動くことができず「津波が来たらどうしよう。北海道の奥尻は早かったな。田の浜はもっと早いだろう」といろいろ考え、逃げようとしても、足が震えて歩けない。四つん這いになり、隣の植木につかまって立ち上がる。何とか歩いて、高台にある「大家」（屋号）さんのお宅にやっと着き、少し安堵した。

そして、海を見た。荒神様（荒神社）に行く道路では、大きい船や小さい船もいっぱい一列に並んだまま波が引いていた。間もなく1回目の津波が来た。あっという間に水面が上がっていく。白い船が沖に向かって走っていくけれど、少しずつ戻される。沖からものすごい速さで、養殖棚が次から次へと海いっぱい流されて来た。あまりの残酷さに息をのむ。その場で見ている人たちも言葉にならず「あっ、あっー」と悲痛な声で叫ぶ。誰もが泣いていた。

弁天島の沖から浪板の方面に一直線の白い波を見た。もっと大きな津波が来るだろうと、恐ろしくなり、りみちゃんと大地君と3人でもっと高い所へと走る。大家さんが下の広場にいる人たちに「灯台が津波で見えなくなったから、早く上に逃げて」と叫んでいるのが聞こえた。私たちは振り向きもせず、ただ高い所へと走った。「もっと高い所へ」という、りみちゃんと別れ、私は美和ちゃんの家に行こうと山を下りる。見たのはがれきの山だった。生まれて、育って、暮らした田の浜がもう終わりかと言葉も出ない。涙も出ない。黙ってぼうぜんとして眺めた。もう何も考えることができなくなり、美和ちゃんの世話になった。

津波だけでも大惨事なのに、火事になった。どこが燃えているのか、炎が近くに見えて、残った家が全部焼けるのではないかと思い、津波より恐ろしかった。山火事が広がり、ヘリコプターで山田高校体育館に避難、さらに青少年の家に移り、今は浦の浜の仮設住宅で暮らす。

あんなに恐ろしくつらい思いは忘れることはないだろうと思っていたのに、記憶がだんだん薄れていく。今はそんな自分が悲しい。浦の浜から沼のように穏やかな海と沈む夕日を眺めては、「毎日同じ空もなし、人生そのものだ」と思いながら、一日一日を大切に頑張っていきたい。

「忘れない・そして前へ」

高台の家にいて助かる

【田の浜】 14

浜登幸子（70歳）

今日は２０１３年9月30日です。

鳥のさえずりが聞こえます。後ろの山で鳴き交わしているのでしょう。素足にはちょっと冷たい空気です。海側の窓からは、下方に遠く光る海が、右手と左手には低い山が見えます。ここは、三方が山で、海に面した平地が広がる地域なのです。美しくて、恵まれた自然の中にあります。

２０１１年3月11日。地震は長かったです。揺れが収まって、唯一落下した額のガラスの破片を掃いていました。遠くでゴーッという音がして「何だろう」と思いながらも片付けを続けていました。ふと、海側のサッシに目をやると一面に茶色の粒々が付着していました。その時は「何？」という感じでしたが、後になって考えると津波のしぶきだったとしか思えません。そうこうしていると、たまたま来ていた義姉が「津波が来んが（来るぞ）」と叫びました。２階のベランダに駆け上って外を見ると、家と家の間から、押し寄せられた物々が……。それしか覚えていません。後に、この間30分くらいと知りました。

過去2回の津波の経験から、「ここまでは来ねが（来ないだろう）」と言い張るおばあさんを連れて、裏手の「山っこ」（屋号）へ行きました。たくさんの人がいました。ショックでした。それすら知らずにいたのですから。ラジオはつけていませんでした。いつも、日に何度もある防災放送も聞こえなかったと思います。もしわが家が下の方にあったら、おばあさんと２人ここに着いたでしょうか。たぶん、間に合わなかったと思われます。

夫は翌日の午前中に現れました。前夜は対岸の国道から火に包まれた田の浜を見て「駄目だ」と思って泣いたそうです。家、家族3人、義姉も無事でした。無自覚極まりない私が今あるのは、あの日、あの時、たまたま「家の中にいた」こと、「家が数メートル高い所にあった」ということに尽きると思っています。そのくせ流されて亡くなったAさんに「どうしてすぐ逃げなかったの？」とか、「どうして家に戻ったりしたの？」などと心の中で問い続けました。

「津波てんでんこ」といいますが……。そう、きっぱりと身一つで逃げられる人ばかりではないのですね。下の方が居住禁止区域になって、将来どんな形態の集落になるのでしょう。途方もなく遠大で見当も付きませんが、より安心な集落になっているはずだと思います。

「忘れない・そして前へ」

職員一丸で患者を救う

【田の浜】 15

看護師 山崎洋子（58歳）

前日に山田病院で当直だった私は午前勤務を終え、夫と買い物をして別々に家に向かった。帰宅してテーブルの上に荷物を置き、冷蔵庫に入れようと一息ついていた。息子は午後4時からアルバイトがあるためシャワーを浴びていた。

午後2時46分、今まで経験したことのない大きな揺れが来た。わが家は3階建てのためか揺れが半端でなく、立っていられず、食器が床に落ちて破損。棚から鍋などいろいろ落下し、足元に散乱した。歩くことさえ危険なのでテーブルの下に潜り込んだ。息子に「大きな津波が来るから、母さん、早く逃げろ。俺も後から行くから」と言われ、いつも持ち歩いているバッグと防災バッグを持って、車で高台に急いで逃げた。

車を置いて田の浜のメインストリートに行くと、多くの人が外に出ていた。その後も余震が続き、家の中は危険なため、皆、外に出て海を見ていた。沖へ逃げようとしている船が、渦に巻かれて沈没した様子を見てショックを受けた。黒っぽい壁のような物が見えた気がするが、それが津波だったのだろうか。「ここでは危ない、もっと上に上がれ。もっと大きな津波が来るぞ」との声で、高台へと急いだ。

落ち着いてから下に戻り、わが家を見ると鉄骨だけが露出し、原形をとどめていなかった。声一つ出ず、ただ涙が頬を伝った。しかし、この状況に悲しんでいる暇はなかった。

夫は、口癖のように「大きな津波が来ても、この家は高さが11メートルもあり、水は3階まで来ないから大丈夫。でも、一応おまえたちは逃げろ。俺は3階で海を見るから」と言っていた。「もし、この震災が夜の出来事だったら夫は3階にいただろう。日中で良かった」と思った。夫は帰宅途中で織笠付近を走行していたが、津波には遭わずに済んだ。

この日は寒く、夜には雪が降ってきた。火災が発生し、あちこちからドーン、ドーンとガスボンベの爆発音が鳴り響いていた。断水で水が使えず、私たちはただ見ているだけしかできなかったが、消防団の人たちはそのような中でも消火活動、被災者救助など一生懸命に活動していた。この行動に感謝するばかりである。

山田幼稚園の先生が「炊き出しをしましょう」と声を掛けた。本家のガス釜を使い、家々から米を集め、おにぎりを作った。水道は断水で使えなかったので沢水を使った。自然の恵みのありがたさを痛感した。温かいおにぎりの味は一生忘れることはないと思う。

避難者の中には足首を骨折している人がいた。処置する用具がなく、新巻きサケの箱を利用し足を固定。自分の防災バッグの中にあったさらしを利用して応急手当てをした。職場のことが頭から離れなかった。誰かに「山田病院は全滅だって」と言われた時はぼうぜんとした。

翌日、息子が「一緒に山田病院を見に行こう」と言ってくれたので、がれきの中、道を急いだ。病院の建物が見えた時は安心したが、「職員、患者さんはどうしたんだろう」と中に入って行くと、1階はがれきの山で真っ暗。恐る恐る2階に行くと、皆元気に働いていた。皆と抱き合い、元気であることを確認し合えた時は本当にうれしく、涙が出た。

翌日から病院に全員泊まり勤務をした。夜間は停電で真っ暗なため、懐中電灯を照らし巡視した。今思い出せば当たり前のことだけれど、本当に大変な思いの中で、全職員で患者さんの命を救えたことは良かった。

震災2日目に、私は体調を崩し、盛岡中央病院へ搬送された。手術を受けることになって、約1カ月間、入院生活を送った。その間はテレビ、新聞の情報だけで少ししか状況が分からず、退院して、夫や息子から当時の状況を聞いて大変だったことを考えると心が痛んだ。

お腹の手術痕を見ると、3・11を思い出す。一生涯忘れることはない。このような震災が二度とないことを祈る。

震災から早2年半が過ぎているが、復興の遅れにいらだちを感じる。早く仮設住宅から出て、

マイナスからのスタート

【田の浜】16

阿部優子（53歳）

あの日は朝から晴天だった。仕事仲間3人と磯採りに出かけ、岩場でおにぎりを食べ、楽しい時間を過ごした。家に帰り、採ってきたフノリの処理をして、コーヒーを飲んで寛いでいた。そこに、ガタ、ガタガタガタと激しい揺れ。「あっ、地震だ。大きいぞ」。2回目も大きく揺れ、長かった。

外からゴー、ゴーとすさまじく大きな音が聞こえ、見ると、ほかの家が大波にのみ込まれながら、ゴロゴロとわが家に押し寄せて来た。「津波だー。2階の隅の部屋に行け！」。夫の大声に私は生後2カ月の孫を抱きかかえ、娘と2階の部屋に駆け込んだ。ガタン、バタン、バリバリッ、ガシャン。ものすごい音がして家が傾き、海水が入ってきた。ベビーベッドや家具が転ばないように押さえ、孫を抱いたまま静まるのを待った。

ドアを開けると、階段やほかの部屋、ベランダは跡形もなく、ひん曲がっていた。私は「何これ、何が起きたんだー！」と叫んだ。窓を開けると、見えるはずのない八幡様が目の前にあった。わが家は波に１００メートル押し流された後、２００メートル引き戻され、ほかの家の上に引っ掛かったのだった。命拾いした私たちは近くの方に長靴を借り、がれきの上を歩いて八幡様へ渡り、一夜を過ごした。そこには三、四十人が避難していたと思う。

次の朝、近くの家で食事を頂いた後、やぶをかき分け、古家に行った。そこには5、6人が身を寄せ合っていた。落ち着く間もなく、昨夜からの火事が山へ燃え移って消えないので、田の浜地区の全員が自衛隊のヘリで避難することになった。しかし、私たち家族は首の座っていない孫を背負って、道なき道、がれきの上を歩き、3キロ離れた娘の夫の友人Kさん宅に身を寄せることにした。

今、冷静になってみて考える。「なぜ地震が起きた時にすぐ逃げなかったのか。避難所ではなく一般の家に避難したのか」。自分たちの非常識さを心から反省し、Kさん宅の皆様に本当に申し訳なく、心から感謝している。

あの時は一般の家にはなかなか情報が届かなかった。船越防災センターに空きが出たと聞き、電気が復旧するまでの間、センターにお世話になった。電気復旧後、古家に戻り、物資の配給に並ぶ日々が続き、理不尽に思う面もあったが、8月12日、やっと仮設住宅に入居することができた。

娘も財産を失い、今後の生活再建のため働かざるを得なくなった。5カ月残っている育児休業

自分の家でゆっくり生活したい。

を断念し、姑が津波で亡くなったために子供を私に預け、出産6カ月目で仕事に復帰した。孫が気管支ぜんそくを患い、毎日の病院通いが半年、週3日通いが3カ月続き、今でも月に4、5回は通院する日が続いている。仕事、孫の世話、家事と忙しく動いていたためか、あまり落ち込むことなく、今日まで過ごすことができた。

昨年10月、釜石に住む実家の父が亡くなった。実家は床上浸水で、半壊通知が出ているにもかかわらず、被災から1年7カ月もの間、何一つ物資の支給がなかった。行政からも訪問されなかったことを知り、いくら父が高齢で病死とはいえ、被災後に市による心のケアがなかったことを理由に、関連死に値するのではないかと、書類を集めて残された母のために申請したが、思いは通じず却下された。「何が絆だ。無情だな」と不満だった。

震災直後は「皆同じ状況なんだ。自分だけじゃないんだ」と、悔しい思いを抑えてきたが、今までコツコツと築き上げてきた財産（新築9年目の家）や生涯の計画を一瞬で失った事の大きさに、日がたつにつれ悔しさが増す。立て直すのは容易ではなく思案している。被災を免れた人との心の溝を今でも感じるのは確かだ。

他国、他県からの物資の支援には、心から感謝している。今なお、田の浜地区では物資の援助が続いている。県内のみならず、他県からのボランティアグループの方たちと婦人会の強い絆には頭が下がるばかりだ。

自分が幸せでないと他人に優しくできないし、心にゆとりが持てない。住環境の再建がなくては一歩を踏み出せない気がする。まだまだ再建の兆しは見えないが、一日も早く家族全員が楽しく暮らせる日が来ることを信じて、マイナスからのスタートである。この震災を経験して避難訓練の大切さと、人との絆が必要だと感じた。

東日本大震災を忘れることなく、今後、この体験を孫たちに語り伝えていきたい。

「明日へ向かって」第2集

まるで地獄絵図だった

【田の浜】17

五十嵐まき子（66歳）

あれから2年と4カ月の月日がたちました。あの時のことは一日たりとも忘れたことはありません。誰が想像できたでしょうか、あの未曾有の大津波を。津波は一瞬にして多くの掛け替えのない生命と財産を奪ったのです。

あの時、私は早川（そうかわ）の親戚宅でお茶を頂いていました。突然の地震でした。今まで感じたことのない強い揺れにただごとではないと感じ、従姉妹（いとこ）にも「津波が来ると思うよ！　早く逃げっぺす！」と言い、家に戻りました。そのころ認知症が進んでいた山田の実家の母が心配で、危険も顧みず夫に車を出してもらいました。

織笠を走っている時、ラジオが「釜石で津波が観測された」と報じていました。私たちは無言のまま車を走らせました。実家に母がいないのを確認し、長崎地区に住む叔父の所へ行き、母と会いました。ありがたかったです。母を叔父夫婦に頼んで田の浜に戻ろうとした時には、長崎地区まで津波に流されたがれきが来ていました。

津波を見ていなかったので、何が起きたのかと戸惑い、頭は真っ白でした。がれきをかき分け、やっと山田中学校に着いたのに、ここも火事が近づいて危険だというので暗い道を歩き、山田高校に避難しました。「今、ここに何百人入っているのだろうか?」。不安で興奮している人、おびえている人、泣いている人、無言の人など、あちこちから話し声が聞こえてきます。「船越の海蔵寺が流れたそうだ」「田の浜は津波と火事で全滅だそうだ」と、ひそひそ聞こえる話に耳を傾けては、背筋が凍る思いをしました。また、甥が消防団の活動中に津波にのまれ、がれきの中から助けてもらったと聞き、泣いてしまいました。

身の縮む思いで一晩を過ごし、夜が明けると同時に田の浜へと歩き始めました。途中、三陸道で車に乗せてもらい、浦の浜からは山道を歩きました。間もなく、大人が数人付き添って歩いている船越小学校の子供たち30人ぐらいに出会いました。悲しそうな顔をして歩いていました。きっと心細かったでしょう。「がんばって、がんばってね」としか声を掛けられませんでした。

前の晩、避難所での話の通り、海蔵寺はありませんでした。高台にある小学校にも、がれきや自動車がいっぱいでした。やっとの思いで田の浜に着きました。「あっ、田の浜がない!」と言

葉を失いました。まるで地獄絵図です。でも、高台にある自宅はかろうじて津波と火事からも免れて残っていました。孤立した田の浜は山火事などで避難指示が出て、少しでも歩ける人は徒歩で、高齢者や子供たち弱者は自衛隊のヘリで対岸の避難所を目指し、避難しました。私はそのまま田の浜に残りました。誰もいないと思うためか、暗くて寂しかったです。数人の女性たちと消防団への炊き出しのお手伝いに参加しました。行方不明者の捜索や山火事の消火など、不眠不休で働く消防団員には、ありがたさで頭の下がる思いでした。

私たちはとんでもない災害に遭遇しましたが、お金に換えられないものを世界中から頂いたと思います。復興はまだまだ遠い道のりだけれど、絆と感謝の気持ちを忘れずに、前へ前へと進んでいきたいです。そして、私の大好きな田の浜へ一人でも多く戻ってほしいです。以前のような集落になってもらいたいです。

はやり言葉の「津波てんでんこ」ですが、私は一人でいた実家の母を心配して、大津波警報の中、山田の実家に向かいました。後に母にこう言いました。「ばあちゃん、津波てんでんこだって。ばあちゃんを助けようとして私たちも危なかったよ」。母は「そうだあが（そうさ）。おめえたちに何かあったら、おら困るから来るなよ」と。その後、母は病死しました。あの時、苦労して育ててくれた母に何であんなことを言ってしまったのだろうといまだに後悔しています。

私の中で「津波てんでんこ」の意味はよく分かります。では、弱者はどうすればいいのか、答えが見つかりません。

今日より良い明日を信じて

【田の浜】 18

坂本加代子（69歳）

「あなたの家はどこ?」。「田の浜のメインストリートへ来れば分かるよ」。友との会話である。

しかし、家も庭の木々も草花も、たくさんの思い出につながる品々は跡形もなく一瞬の間に消え去り、1年半たった今、メインストリートは雑草の中に埋まったままだ。

3月11日、地区の比較的高台の親戚に避難したが、よもやそこまで津波が来るとは思いもよらず、気がつけば91歳の義母と一緒に遠くに流されないように流木にしがみつき泳いでいた。

その後の行動は無我夢中で、瑞然寺の避難所に義母を預け、私の着替えを確保できたのは日暮れ近くだった。そのころには家屋も山も火が回り、安全な場所へと移動を繰り返した。自分の住む集落が火の海となっている現状を、なす術もなくただぼうぜんと眺めていた。皮肉にもその熱が冷え切った私の身体には暖かく感じられ、どこか他の地の出来事のように思えてならなかった。

陸の孤島となった集落から、ヘリコプターで山田高校の避難所へ移動した。3日後に夫の元気な姿を見て喜んだが、周りには家族を亡くした方も大勢いて、複雑な思いだった。日頃の便利でぜいたくな生活とは一変した避難所暮らし。誰しもが我慢の連続で、これからの事が不安だった。じっと動かず、目を伏し背を屈め、おびえながら三食のおにぎりの配給をじっと待った。そんな状況の中でもほとんどの人が同じ集落で顔見知りだったから助け合い、励まし合って救われたような気がした。

「今日より悪い日はない、明日はきっと良い日」。この言葉で自分自身を奮い立たせ、震災後半年くらい苦しめられた、海を見ると感じた胸苦しさと吐き気から何とか切り抜けた。幸いにも一軒家を借りることができ、入院していた義母も快復。1年半たった今、生活面では落ち着きを取り戻しつつある。

多くの方々から感謝し切れないほどの善意を頂いた。今までの自分本位の行動や考え方から、常に周囲の事も気にかけるように変わらなければと思う。

婦人会の呼びかけで集まる仲間との出会いが、やむなく離れて生活する者にとって、どれほど元気を与え、張り合いになったことか。今後どのように集落が変わるのか見当もつかないが、いつでもどこでも目を閉じると、私のメインストリートは以前のままの姿を、ありありと脳裏に映し出してくれる。

今日よりも明日の良い日を信じて、これからも前向きに生きたいと思う。

明けない夜はない

【田の浜】 19

保育士 佐々木千秋（59歳）

あの日、船越保育園で午後からの仕事に就いていた私は、子供たちを守ることに必死でした。長く強い揺れに不安がる子供たちに「大丈夫だよ」と声をかけながら避難した園庭で見た津波の光景。対岸に見える田の浜の堤防を、津波が船と共に越えて行くさま。その先はわが家。「夫は？」と頭の中は真っ白になり、津波に飲み込まれ流されていく家々や、津波がぶつかり合って上がる水柱をぼうぜんと眺めるしかありませんでした。

強い余震におびえながら、「明けない夜はない」と心に言い聞かせて待った夜明け。翌日、夫と再会できました。津波にのまれながらも自力で屋根にはい上がり、流されていくところを助けられた、と聞いた時には、安堵と同時に身震いを感じました。2日目の夜には、安全だと思い、全然心配していなかった実家も流されたと聞きました。

夜明けを待って避難所を探し歩き、実家の家族皆と無事を確かめ合いました。83歳の母が津波にのみ込まれ、もがきながらやっとがれきの上に出て、1人で助けを求めて歩いたことや、避難所に来るまで多くの人に助けられたことも、知りました。

県外にいる娘夫婦と息子と連絡が取れず、携帯電話を握りしめて過ごした夜。衛星電話がつながってやっと声が聞けた時のうれしさは、次の希望へとつながっていった気がしました。

今、この文章を書くにあたって、いろいろな事を思い出そうとするとやはりつらくなります。先の事を思うと不安になります。でも、震災で亡くなった方々の無念の思いを胸に、命ある限り自分らしく生きていきます。もう二度とあんなつらく悲しい思いを誰もしないように願って。

「明日へ向かって」第1集

張り詰めた心を支え合う

【田の浜】 20

佐々木光子（77歳）

2年前のあの日、友人宅へ行こうとしていた私は、ただならぬ状況に外の様子を見ると、近くのわかき保育園の子供たちが上の方へと避難しているところでした。すぐ近所の家に行くと「津波が来るかもしれないから上着を着て来て」と言われて自宅へ戻りました。

日頃から防災リュックは出してはいたものの、中身は特別用意しておらず、貴重品が入っている手提げと、前日買ってあったパンをとっさに放り込みました。仏壇の線香台などがいろいろとひっくり返っていたけれど、後で片付けようとそのまま外へ飛び出しました。

ものすごい音が背後から襲ってくるのを体中で感じ、気づくと足元に水が迫っていました。サ

大浦

Oura

6

chapter 6

のどかな漁村の風景は津波で一変し、漁具やがれきが散乱した
（3月25日午後0時21分撮影）

ンダルをつっかけた足がもつれそうになりながらも、必死に山の方へと走りました。あの時、倒れた物を片付けたり、色々と物を用意したりしていたら家と共に流されていたに違いありません。振り返ることなく走ったから、あの恐ろしかった波は目にしていません。着の身着のまま外に飛び出したから、今日こうしていられると思います。

その後は高台の民家で2泊、自衛隊のヘリで運ばれた吉里吉里（きりきり）中学校（大槌町）で2泊、山田高校の避難所で一夜を明かしました。翌朝、探し回っていた娘が迎えに来てくれて、そのまま娘夫婦の家へ身を寄せました。仮設住宅に入居するまで、4カ月もの間同居させてもらいました。娘の家も知り合いの家族が3組避難していて、10人ほどが共同生活をする状態でした。

避難所で生活した人たちよりは恵まれた環境でしたが、電気が復旧するまでは、明るいうちに食事作りを手伝ったり、水をもらいに行ったり、張り詰めた気持ちを皆で支え合い、心を一つに協力し合って過ごしました。夜になると、お湯入りのペットボトルを何本もこたつの中に入れて皆で囲み、ひたすらラジオに耳を傾けたこと、娘の結婚式で使ったメモリアル・キャンドルが役に立ったことなど、いろいろと思い出されます。

現在の暮らしにも慣れ、皆様のお陰で何とか生活しております。本当にありがとうございました。これから先、老いていく自分に不安は隠せませんが、一日一日を大事にして、感謝の気持ちを忘れることなく、自分なりに歳を重ねていきたいものです。

「明日へ向かって」第2集